

「ルカノール伯爵」 (5)

—パトロニーオの書—

ドン・ファン・マヌエル
訳 木原 太 源

第二十三話 「ドン・マヌエル親王の鷹に鷲と鷲 とのことで起った事について」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトロニーオとこのように話をされた。

「パトロニーオ、予はこれまで数多の者と戦をして参った。ところが、戦が終ると『別の敵と戦を始められよ』とか『身を休め平穩にくらされよ』或は『新たに回教徒に戦を仕掛けられよ』と勧める方が多々ある。お前に優る助言の出来る者が他におらぬことは承知なので、このような際の身の振り方を進言してもらいたい」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「この件

で殿が極めて的確に振る舞われますには、ドン・マヌエル親王の鷹に鷲と鷲とのことで生じた事をお聴きいただきませうば幸でございます」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「ある日ドン・マヌエル親王がエスカローナの近くで鷹狩りをなさっておられた時のことでございます。親王は鷲目掛けて鷹を放たれました。鷹が獲物に襲いかかろうとしました時、一羽の鷲が鷹目掛けて飛来したのでございます。すると、恐れをなした鷹は鷲から離れ遁走し出したものですから、鷲は捕らえられぬと判断するや飛び去りました。それを見て鷹は再び鷲に襲いかかると巧みに捕らえ、その息の根を止めようとした瞬間、再び鷲が姿を現しましたので、またもや鷹はその場を離れたのでございます。しかし、鷲が姿を消すと再び鷲を追跡し始めました。このような事が幾度も繰り返されました。つまり、鷲の姿が見えなくなると鷹は鷲を襲うのです。すると、鷹を襲撃するために鷲が飛来するという具合でした。鷲が鷲を捕らえさせてくれないことが判りましたので、鷹は鷲を差し置くと、鷲の頭上高くに舞い上がるや急降下して襲いかかりました。そして、繰り返し攻撃しては傷めつけましたから、鷲はとうとう逃げ去ったのでございます。それから再び鷲を追跡しました。二羽が組んずほぐれずの状態になりました時、またもや鷹を狙って鷲が飛来しました。これまでの努力が無駄であったことを悟ると、鷹は鷲の頭

上高くに舞い上がり、それから揮身の力をこめて体当たりしたのでございます。すると、鷲の片翼が折れてしまいました。翼を折られた鷲が落下して行くのを見て、鷹は再び鷲を追撃し、またたく間に殺してしまいました。鷹がこのように行動しましたには、鷲の妨害を免れれば鷲狩りを諦める必要のないことを承知していたからでございます。

ルカノール伯爵様、殿もご承知のように、ご自身の名譽と肉体及び魂の至福は神への務を最大に行なわれますことにあります。またお立場からも、回教徒との戦は、神聖かつ真正なカトリック教を称えるために神にお仕え出来る最良の務であることをご承知でございますれば、周囲の敵の脅威が及ばぬことの確たる時は、回教徒をお討ちになることをご進言申し上げます。これにより殿は多くの得を持たれるであります。一つは神に奉仕なさること、二つは騎士としての本分を全うなさること、でございます。寄食家のような安逸な生活を送られませぬように。かかる態度は立派な君主にあるまじき姿だからでございます。君主が義務の遂行を怠る時は、臣民を正しく見る目が曇ったり、彼らのために果さねばならぬ務を怠ったりするものですし、不要なことに恵念するものでございます。事実殿が手掛けられます務の中でも、モロロ人との戦ほど肉体と魂にとりまして結構かつ光栄で有益な務はございません。本書の第三話、イングラントのリチャード王が跳び込んだ話と、その行為で得られたものを思い出して下さい。またお考えいただきたい

ことは、殿は不死の人ではない、ということでございます。さらにご留意いただきたいのは、公正なる神は、殿がこれまでになされた度重なる神を恥ずかしめる行為や犯された罪に対して、罰をお与えになるといふことでございます。ですから、罪の償いがなされる機会を得る幸運が持たれるかどうかをお考え下さい。モロロ人との戦の最中に告解をされ、その後で最期を遂げられましても、殿は殉教者となられて神の国へ行かれるであります。また、討死されなくとも善行と善意は殿の魂を救済するでありますから」

伯爵はこの進言を非常に有意義であると判断されたのでそれを実行に移す決意をされ、神にそれが行なえるよう助力を乞われた。ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような詩を作った。

汝に神の加護が与えられるなら、
死後の生命を得るよう努力せよ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第三十四話 「仲間の手引きをした盲に起った事
について」

ある時ルカノール伯爵は助言者パトロニーオとこのように話をされた。

「パトロニーオ、予が心から信頼し、また信愛されていると確信する身内の者が、その道中に危惧の念を抱いておるある邑へ行くように勧めるのだ。そして『ご案じなされるな。あなたが危険な目に会われるよりも私が先に命を落すでしょうから』と申すのだ。そこで、予はこの件に関してお前に助言してもらいたい」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「私の所見をお聴きいただきますには、ある旨とその仲間に起きました事をお聴きいただきますれば幸でございます」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「ある邑に住むひとりの男が失明し、盲になりましたので、暮らしに窮する羽目に陥ったのでございます。同じ邑に住む他の盲がやって来て『二人で近くの隣り邑へ行くこうではないか。そこで施しを乞えば身を養えるだろうとおもうので』と話を持ち掛けました。すると先の盲は『そこへ行く道はよく知っている。その上、深い窪みや涯が随所にあつて、道中が大変困難なことも。だからその邑へ行くのはとても恐ろしいんだ』と応えました。仲間の盲は『ご心配なされるな。私がお伴するのですから何も起りはしませんよ』と応じ、さらに説得を重ねました。そして、隣り邑にはよい稼になることが沢山あると繰り返し念をおしましたので、

先の盲は仲間の言葉にすっかり乗せられ、邑を後にしたのでございます。ところが、険しい個処にさしかかった時のことでございます。先導役の仲間が転落しましたので、道中を恐れていた方も転落してしまつたのでございます。

伯爵様、殿のご懸念には十分な根拠がござり、その上、現に危険が存するものでありますならば、殿に危険が及ぶよりも先にご自分の方が落命する、とお身内の方が申されましても、決して危難に御身が巻きこまれぬようになさつて下さい。お身内の方が落命されれば殿にも危険が及び、その後、命を落されるようなこととなりますと、殿には百害あつて一利なしとなりましょうから」

伯爵はこれを有意義な助言であると判断されたのでその通りに実行された。すると結果は上々であつた。

ドン・ファンはこの教訓談がとても有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような詩を作つた。

友が安全を約束しても、

危難に身を投じるな。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第三十五話 「猛々しい女を妻取った男に起った事について」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトロニーオと話をしておられたが、このようなことを語られた。

「パトロニーオ、縁者のある若者が、富も家柄も彼より申し分のない娘との縁談が持ち上がっていると告げた。彼が言うには、その娘は世間に二人とはおらぬ名うてのじゃじゃ馬で通っておるとのこと。さもなくばこの縁談は彼にとって願ってもないものだそうだ。そこで、予はそのような素性が判っておる娘との結婚を勧めるべきか、或は止めるように言うべきなのかをお前に助言してもらいたい」

「伯爵様」とパトロニーオは返答した。「そのお方があるモーロ人の子息のようにすっかりした若者でございますなら、その女性と縁を結ばれますようにお勧め下さい。しかしながらそのようなお方でございませねば、お勧めになってはいけません」

伯爵はそれがどのような話であるのか聞かせてくれるようお願いになられた。

パトロニーオは次のように語った。「ある邑にことのほか才知豊かな息子を持つ善良な男がおりました。しかし、この男は胸中に抱く様々な企てを行なえるほど裕福ではありませんでした。これが息子の一番気懸かりなことでございました。意欲はある

ものの財力が伴わなかったからでございます。

同じ邑に、彼の父よりもずっと有力で裕福な男がおりました。この男には娘一人しかいないのですが、これが先の若者とはまるで正反対で、しっかり者の彼とは打って変わって私の強いじゃ馬娘でございました。ですから世の男は誰もこの悪魔との結婚を望まなかったのでございます。ある日、若者は父親のところへ行くと言ったのでございます。『父さんが私にそれ相應の生活が送れるだけのものを残せるほど豊かでないことは判っています。ですから、私は貧しさに耐え忍ぶか、或はこの地を離れねばなりません。そこでこのように考えました。父さんも賛成して下さいるのなら、私は裕福な暮らしをさせてくれる結婚相手を探すのが良いとおもうのです』と。父親は『そのような相手が見つければとても嬉しい』と返答しますと、息子は『よろしければ、お隣の娘さんとの縁談をお願いしていただきたいのですが』と告げたのでございます。息子の考えを聞いて驚いた父親は『何故そのようなことを考えたのだ。あの娘を知っておる者は、如何に貧しくとも誰一人として彼女との結婚を望みませぬのに』と訊ねました。しかし『お願いですからこの結婚をまとめて下さい』と息子は切願しました。あまりにも熱心な息子の頼みを奇異に感じはしましたが、父親は承諾しました。父親は早速親友である隣人に会いに行くと、息子の願いを伝えるかたわら、息子はあえてお宅の娘御を妻に迎えるのだから同意するように頼みました。この願いを聞いて、隣人は次のよ

うに返答したのでございます。

『これはたいへんだ、あなた。もし同意すれば私はあなたの親友ではおれなくなります。あなたにはりっぱなご息がおありなのに、私が彼の災難や死を黙認すれば大罪を犯すことになると思うからですよ。ご息が娘と結婚されると、娘に生命を奪われるか、或いは死よりも悲惨な暮らしをすることに成るは間違いないからです。あなたのご好意を断るためにこのようなことを申しているのだとはおもわないで下さい。それでもお望みとあらば、喜んで娘をあなたのご息子に、また家から連れ出してくれるならどなたにでも差し上げますよ』

若者の父親は隣人の言葉に謝意を述べると『息子が結婚を望んでいるのですから、あなたの言葉を伝えます』と言ったのでございます。

挙式が終ると、花嫁は夫の家へ連れて行かれました。モロ人達には、新婚夫婦のために夕食の仕度や食卓の準備を整えたり、また翌日迄二人だけにしておくといった仕来がありました。このように事は運ばれたのですが、若夫婦の両親や親戚の者達は心配でならなかったのでございます。翌日新郎が死体で或は重傷を負った姿で見つかるものと恐れられたからでございます。

彼らは二人だけになりますと直ちに食卓につきました。妻が口を開く前に夫は食卓の周囲を見回しました。すると、一匹の犬が目に入りましたので険しい声で犬に向かってこう言ったのでございます。

『おい、畜生、俺達に手洗いの水を持って来い』

犬は言われた通りにはしませんでした。若者は腹を立てるとさらに険しい声で『二人分の手洗い水を持って来い』と命じたのですが、犬はその通りにはしませんでした。言い付け通りにやらないのが判ると、若者は激昂して立ち上がり、剣を握むと犬に立ち向かいました。犬が若者の近寄って来るのを見て逃げ出すと、彼はその後を追いかけてきました。食卓や暖炉の上などを跳び越えたりして、家中を駆け回った末に犬を捕えた若者は、その頭と四肢を切り落とし、さらに胴体を八つ裂きにしてしまったものですから、家具や衣類は血潮に染まり、家中血の海となりました。

若者は激昂し、血まみれの状態で再び食卓につきました。周囲を見回しますと、一匹の猫が目にとまりましたので『手洗いの水を二人分持って来い』と言ったのです。猫がその通りになかったものですから再び命じました。

『このごうつくばりめ、言う通りにしなかった犬を俺がどのような目に会わせたか見ていなかったのか？ 言うておくが、少しでも強情を張れば奴と同じ目に会わせてやる』

猫は犬同様に手洗いの水を持ってくるといふ習性を持ち合わせておりませんので、言われた通りにしませんでした。

猫が命じたことをやらないものですから若者は席を立つと、その四肢を握み、犬の時よりも一層激昂して壁に叩きつけ、ぐしゃぐしゃにしてしまったのでございます。ものすごい表情で

食卓に戻ると四方に目を配りました。夫のこのような振る舞いを目の当たりにした妻は、気が狂れているとおもってひと言も口をききませんでした。

この家に一頭しかいない馬が、四方に配っていた若者の目に触れましたので『手洗いの水を持って来い』と、すさまじい顔付きで命じました。馬は言われたことを行ないませんでした。言いつけ通りにやらないのが判ると、若者は馬にこう言ったのでございます。

『どうしたんだ、お馬さんよ！ 他に馬がないから、言われたことをやらなくとも俺が許すとおもっているのかい？ そんな考えは止めるんだ！ 気の毒だが、俺の命令通りにしないのなら、はっきり言っておくが、他の奴らと同じように無残な最期を遂げさせてやる。俺の命令に従わないのに、このような目に会わない生き物はいないのだ』

馬はじっとしていました。命令に従わないことが分かると若者は馬のところへ行き、烈火のように怒って首を刎ね、滅多斬りにしました。一頭しかいない馬を切り殺したのを目の当たりに見、命令に従わない者は全て同じ目に会わせるという夫の言葉を聞くと、ふざけて言っているのではないことを知った妻は、生きた心地がしないほどの恐怖心に捉われました。

荒れ狂い血だらけになった夫が再び食卓につくと『俺の命令に従わない馬や男や女がこの家にいるのなら皆殺しにしてやる』とわめいたのでございます。若者は腰を下ろすと血糊のついた

剣を膝の間に抱え、周囲を見回しました。

あちこち見回したものの生き物が目に入らないものですから、ざらざらした目を妻に向けるや剣を握って怒鳴り付けました。

『立って手洗いの水を持って来い』

妻は今にもずたずたに切り裂かれるのではとおもっていましたが、さっと立ち上がると手洗いの水を夫に差し出しました。すると夫は妻にこういったのでございます。

『ほう！ 命じた通りにやってくれたとはありがたい！ でなかつたらあの愚かな畜生共が俺を怒らせて殺されたように、お前も同じ目に会っていたところだ』

次に夫は『食い物をくれ』と妻に命じました。妻は言われた通りに行ないました。命令される度毎に妻は自分の頭が床に触れたとおもったほど、夫はすさまじい怒鳴り声で言いつけました。このようにして二人はその夜を過しました。妻は一度も口をききませんでした。夫の命令には従いました。二人が眠りについてしばらくすると、夫は妻にこう言ったのでございます。『今夜は気が立っているからよく眠れない。明日誰にも俺を起させないよう気をつけておけ。それにうまい朝飯を用意しておけ』

早朝、二人の両親や親戚の者が戸口までやって来ました。ところが、話し声がしないものですから、新郎は死んだか負傷したのだとおもい恐ろしくなりました。扉の隙間ごしに花嫁の姿は窺えるものの新郎が見えませんが、一層不安になりました。

ところが、中の様子を窺っている彼らに気づいた花嫁はそっとびくびくして近寄るところ言ったのでございます。

『馬鹿、間抜け！ ところで何してんのよ？ よくもまあ思い切ってこっそりと来れたわね？ しゃべらないで、さもないと私達皆んな生きてはおれないわよ』

彼女の言葉を聞いて一同は呆気にとられました。しかし、昨夜の一件を知った時にはこぞって若者を誉めそやしたのでございます。それは彼が第一日から自分の家を見事に治めることができたからでございます。それからというもの、新婦は夫によく従いましたので、二人は幸福に暮らしました。それから数日たって、舅が婿の真似をしようと同じ手を用いて鶏を殺しましたところ、彼の妻はこう言ったのでございます。

『どこのどなたか存じませんが、もう手後ですよ。百頭の馬を殺しても、もはや何の役にも立つもんですか。昔にやっておくべきだったんです。私達お互いのことはよく分かりあっているんですから』

伯爵様、その娘御を妻取りたいとお考えのお身内の方が、モーロ人の若者の様なお方でございますなら、結婚をお勧め下さい。ご自分の家を治められるお人でございますから。しかし、それが出来ないお方であれば、ご自分の運命に身を委ねさせることでございます。さらに、殿にご忠告申し上げておきます。殿はご交際になる全ての方に、常に殿への身の振る舞い方を悟らせることでございます」

伯爵はこれを有意義な助言であると判断されたのでその通りに行なわれた。すると結果は上々であった。ドン・ファンはこの教訓談は有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

己を初めに示しておかずば、
望んだ時は遅きに失す。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第二十六話「妻と息子が一つの夜具で一緒に寝
ているのを見た商人に起った事に
ついて」

ある時ルカノール伯爵がパトロニオと話をされた際、ご自身に対する噂に大変なご立腹で、不名誉の上もないことから、パトロニオにこのように告げられた。「汚名挽回のために永遠に手柄として残るような偉業をやりたい」と。パトロニオはあまりにも激しい殿のお怒りの様子を目にし、次のように返答した。

「伯爵様、ある時助言を求めに行った商人に生じた事を

お聴きいただきますれば幸でございます」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「とある邑に助言を生業としておりますひとりの偉大な賢者がございました。先に申し上げました商人がある日賢者の噂を耳に致しましたので、助言を求めに会いに行き『ひとつお願いします』と頼みました。賢者は『助言は金子の多寡によるのでいくら支払うつもりなのか』と尋ねましたので、商人は『一マラベディー分の助言を求めたい』と応えました。賢者は一マラベディー貨を手にすると商人に次のように言ったのでございます。

『さて、食事に招かれはしたが出される料理の品数が分からぬ時は、最初のをたらふく食べることじゃ』

商人が『役に立つ助言をくれなかった』と言いますと、賢者は『そのような助言を与えねばならぬほどの金子はもらっていない』と応じました。そこで商人は『これにふさわしい助言を頼む』と言って一ドブラ貨を与えたのでございます。すると賢者は『立腹のあまり性急に事をしでかしそうになった時は、真相が判明するまで嘆いたりとり乱したりしないように』と告げたのでございます。次々に助言を求めれば有金を残らずはたいてしまいそうでしたから、商人はそれ以上求めるのを止めると、これだけを胸中にしまいこんだのでございます。

商人は遙かな遠方の国々へ船出することになり、身重の妻を残したまま旅立ったのでございます。長い才月をかけて商を続

けましたので、帰郷しました時には、後に残した妻が生んだ息子は二十才を越えておりました。他に息子がいないのと、夫は死んだものと推っておりますから、妻は息子を慰めとして非常にかわいがりました。その上、夫を愛しておりましたので息子を「あなた」と呼んでいたのでございます。幼児の頃と同じように、妻は息子と寝食を共にしておりました。それにしても夫の消息不明が悲しくなりませんでしたが、操正しく暮らしておったのでございます。

商人は全ての品を売り尽してしごく満悦でした。ところが故郷の港に戻りましたのに、連絡もせずにとつとわが家へ行くと、屋内の様子を探るために人知れず身を潜めたのでございます。昼過ぎになって戻って来た息子に母親はこう言ったのです。

『言ってちょうだい、あなた。どこからいらったの』

商人は、妻が若者を「あなた」と呼ぶのを耳にして、不愉快になりました。妻と愛人関係にある男、或は再婚した相手、と思ったからでございます。前者の方がもっともらしくおもえました。相手があまりにも若過ぎたからでございます。すぐにでも両人を殺してやりたかったのですが、一ドブラで買い求めた助言を思い起し、逸る心を落着かせました。

夕方になると食事をするために二人が卓に着きました。一緒に食卓を囲んでいる二人を見て、商人は殺してやりたいという念がいっそう激しくなったのですが、買い求めた助言が彼の

気持を静めたのでございます。しかし夜になり、二人が同じ夜具に入って寝るのを目にしました時は、勘忍袋の緒が切れ、商人は飛び出しました。激怒して出はしましたが、あの助言を思い起すと、気を取り直しました。

灯りを消す前に母親は激しく泣きながら息子にこう切り出したのでございます。

『ああ、いとおしいお前！ あなた！ 父さんが船出して行かれた国から船が一艘港に入ったそうね。後生だから明日の朝早く見に行っておくれ。ひよっとしたら父さんのことで何か良い知らせがわかるかもしれないので』

商人は、妻の話から、彼女を身重のまま残して行ったことを思い出すと、あの若者は自分の息子であることを悟ったのでございます。商人の喜びが格別であったことは申すまでもございません。同時に、恐ろしい犯罪となったでありましょう。妻子殺害の決行をお許しにならなかつた神に、彼が心から感謝したことも申すまでもございません。商人は、激怒にかられて性急に何事も行なうな、という助言に支払った一ドブラが充分に値打ちのあったことを知ったのでございます。

伯爵様、世間の噂に勘忍出来ぬお気持ちになられるのもごもつともな場合でありまして、事実関係が明白でなければ、真相が判明するまでしばらくお待ちになられまして失う物などございませぬので、性急に怒りに身をまかされることのなきようご忠告申し上げます。性急な行動はすぐさま後悔の因もととなりま

しょうから」

伯爵はこれを有意義な助言であると判断されたのでその通りに振る舞われた。すると結果は上々であった。ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

怒りに駆られて性急に振る舞った時は、
後悔の種は自分で摘み取れ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第三十七話「フェルナン・ゴンサーレス伯爵が

戦で勝利した後、家臣に与えた返
辞について」

ある時、伯爵が疲労困憊気力も尽き果て、さんざんな目に会って戦から戻られた。ところが、一息をつく間もなく、再び他の戦が持ち上がったという急な知らせが届いた。大半の家臣は、しばらく休息をされ、しかる後状況に応じて行動なさるようにと進言した。そこで、伯爵はこのような状況下での身の処し方をパトロニーオに訊ねられた。パトロニーオは次のように返答

した。

「殿、最もふさわしい身の処し方をなさいますには、ある時フェルナン・ゴンサーレス伯爵が家臣の方々にお与えになられたお応えの件をお聴きいただきますれば幸いです」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロニオは語り出した。「フェルナン・ゴンサーレス伯爵がアシーナスでアルマンソール王^⑩を打ち破られた戦では、大勢の家臣が討死にされ、生き残られた方々も深傷を負ったのでございます。傷が癒えぬのにナバーラ王が領地に攻め込んだことを知ると、伯爵はご家臣にナバーラ軍との戦闘準備をお命じになりました。すると、彼らはこぞって『馬も我らもまだとても疲れております』と述べ、さらに『そのために出陣を延ばされなくとも、殿も我らも深傷を負っておるのですから見合わされるべきです。全員完治するまでお待ち下さい』と申したのでございます。

伯爵は家臣一同が領国の分割を望んでいることがお判りになると、身体の傷よりも名誉の方に強く痛みを覚えられましたので、家臣に向かってこう申されたのでございます。

『皆の者、我々は負傷を理由に出陣を延ばしてはならぬ。これから受ける傷が先の戦の傷を忘れさせてくれようぞ』

ご家臣方は、殿が領地と名誉を守るために己が身を顧みられないことを知ると、殿と共に出陣したのでございます。伯爵は戦に勝利され、栄光に輝かれました。

ルカノール伯爵様、殿の務でありますご領地と、家臣方及び殿ご自身の名誉をお守りになりたくば、決して労苦や御身の危険を嘆かれてはいけません。新たなるものが先のを忘れさせてくれるよう振る舞われることでございます」

伯爵はこれを有意義な助言であると判断されたのでその通りに振る舞われた。すると結果は上々であった。ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

立証された真理なれば銘記せよ、
すなわち、名誉と安逸は共存しない。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第二十八話 「宝石を背負って川で溺死した男に 起った事について」

ある時、伯爵はパトロニオに「多額の金子の入手が見込める所に留りたいと切望しておる。それは莫大な利を予想させるが、さりとて留まれば生命を危険に曝すことになるのが不安ならぬ」と語られ、「対処すべき方法を助言してくれ」とお頼

みになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは返答した。「殿にとりまして最もふさわしいと考えます身の処し方をなさいますには、大変貴重な物を担いで渡河した男に起きました事をお聴きいただきますれば幸でございます」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「ある男が多量の寶石を担いで歩いて歩んでおりました。大変な量でしたから重さも大変でございます。ところが、川を涉らねばならなくなったのでございます。とても重い荷物を背負っておりましたから、何も持たぬ時よりもはるかに身は沈みました。川の半ほどにさしかかりますとさらにひどくなりました。岸にいた人がその時『荷物を放さないと溺れてしまうぞ』と大声で叫んだのですが、あの愚か者は、溺れば荷物もろとも生命も失うが、荷物を捨てれば、それを無くしたからとて、生命は無事であることが判らなかつたのでございます。背負っている宝石の値打ちに目が眩んで手放そうとはしませんでしたから、溺死し、荷物と共に身を亡ぼしたのでございます。

ルカノール伯爵様、入手が見込まれます金子などは殿に巨利をもたらすでありましょうが、彼の地に留ることで御身を危険に曝すことになるのでしたら、利欲に駆られてそのような行動をお採りなさいませぬようご忠告申し上げます。殿の誉れとなるか、なさざれば名折れとなる事以外には、御身を危険に曝さ

れることのなきようご忠告申し上げます。くだらぬ事や強欲が因で自らの身を軽んじたり危険に曝す者は、偉業を成す考えない者であることをよくよく心得下さい。御身を大切になさいます方は、家臣から敬われるよう振る舞われるはずでございます。人は自らの身を大事にするが故に敬われるのではなく、家臣の尊敬を得るような振る舞いをするにより敬服されるのでございます。そのようなお方であれば、御身を大切になさいますし、強欲やくだらぬ事のために身を危険に曝したりはなさらぬのは確かでございます。しかしながら、非常時態の際には、御身分ある自重の士ほど迅速果敢に危険に身を投じられる方はこの世におられぬことも確かでございます」

伯爵はこの教訓を有意義であると判断されたのでその通りに振る舞われた。すると結果は上々であった。ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

欲に駆られ身を危険に曝す者に、
幸福は滅多に長続きしない。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第三十九話「燕と雀とのことである男に起った事について」

ある時ルカノール伯爵が助言者パトロニーオとこのように話をされた。

「パトロニーオ、二つの隣国のどちらか一方との戦が避けられそうにないのだ。最寄りの国はもう一方ほど強国ではない。そこでこの件に関して予の身の処し方を助言してもらいたい」

「伯爵様」とパトロニーオは返答した。「この件で御身を処されますに最適の方法をお判りいただきますには、燕と雀とのことで、ある男に持ち上がりました事をお聴きいただきますれば幸でございます」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「体調のすぐれませぬ男が、鳥の騒がしいさえずりに悩まされ、静かに眠れなかつたものですから、友人に『燕や雀の鳴き声から解放されるにはどうしたらよいか助言してくれ』と頼みました。

友人は『両方から自由にしてやることは出来ないが、雀か燕のどちらかの鳴き声から解放される術を知っている』と告げました。すると男は『鳴き声は大きいが燕は渡鳥であるのに雀は留鳥だ。そこで、鳴き声の小さい留鳥の雀よりも渡鳥だが鳴き声の大きい燕から自由になりたい』と返答しました。

伯爵様、さほどでない最寄りの隣国とよりもむしろ強国ではありませんが遠方にある国と戦をなさいますことをご忠告申し上げます」

伯爵はこれを有意義な助言であると判断されたので、その通りに実行された。すると結果は上々であった。ドン・ファンはこの教訓談を気に入ったので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

戦のせざるを得ない時は、
強国であっても遠方のと始めよ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第四十話「カルカソーナ^①のある執事が自らの魂を失った理由について」

またある時、ルカノール伯爵が助言者パトロニーオと話をされた際、次のように語られた。

「パトロニーオ、死が不可避であることは承知なれば、死後予の魂の為となり、また万人が予の業績なることを認知するよう、不滅で衆目的となる物が残せるよう振る舞いたい。そ

こで、それが叶えられる最良の手だてを助言してもらいたいのだ」

「伯爵様」とパトロニーオは返答した。「手だてや意向が何でありまして、善行は常にすばらしいものであります。しかし、人が自らの魂の為に企図することを実行する際に踏まねばなりません手だてや意向をお判りいただきますには、カルカソナーのある執事に生じました事をお聴きいただきますれば幸でございます」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「カルカソナーのある執事が病に倒れました。死を覚悟致しました時、ドミニコ会の修道院長とフランシスコ会の修道院監督を呼びに遣ったのでございます。彼は両名に己の魂の為になることを遺言すると、死後彼らがその通りに果してくれるよう言いつけました。万事遺言通りに行なわれました。執事は己の魂の為に多くの施物を遺しました。ですから、何もかも申し分なく迅速に遂行されましたので、両名は彼の善意にとても満足し、彼の魂の救済に十分希望を抱いたのでございます。

それから二・三日たって、邑にいるひとりの悪魔にとりつかれた女が、数々の驚くべき事を口にするという出来事が起きたのでございます。悪魔は人間が行なった全ての言行を知っておりますので、この女の口を借りてしゃべっていたという訳でございます。二人の僧は女が不思議な事を口にして知るのを知る

と、彼女との面会を思い立ちました。執事の魂のことで知っていることを訊ねるためにでした。二人は実行しました。ところが悪魔にとりつかれた女の家に入るや否や、彼らが何ひとつ訊ねぬ先に、『両人の来訪の目的は承知している。お前達が聞きながら知っているあの魂は、ほんの少し前地獄に置いてきた』と告げたのでございます。女の言葉に彼らは『虚言を弄しておる』と反論しました。事実、執事は告解しておりましたし、教会の臨終の聖礼も受けておりました。ですから、キリスト教徒としての信仰心は疑う余地もなく、女の言っていることが真実であるはずがなかったからでございます。女は『確かにキリスト教徒としてのあの男の信仰心は本物だ。だからあの男が臨終の際、真のキリスト教徒たる者の義務を果しておれば、魂は救われたであろう。しかし、あの男は誠実なキリスト教徒として振る舞わなかった。己の魂の為になることを行なうよう遺言はしたが、自らの務として善意から言ったのではない。死後行なうように遺言したあの男の真意は、彼が他界すれば実行されてもよいが、そうならぬ時はしなくてもよいということなのだ。彼の死後、つまり彼は財産を自らのために使えなくなつた時、実行するよう遺言しておいたのだ。その上、善行により永遠に名を残し世間の評判を得ようという魂胆から、財産を寄進したからだ。あの男は善行はしたが本心に基づいて行なつたのではない。神は単に善行に報われるのではなく、善意からなされた行為に報われるのだ。善行はその意図の中に在り、執事のそれは不純であつ

たから、よい広報を得なかつたという訳だ』

伯爵様、助言をお求めになりましたので献言させていただきます。考えますに、善行は存命中になさることでございます。それにより善果を得られますには、第一にこれまでの不当な行為の償いをなさることでございます。子羊を盗んでその足を神に捧げても、ほとんど役に立たないからでございます。強奪や不正に入手された他人の物を施されても、ほとんど殿の為になることはございません。善き施物となりますには次の五つの条件が充たされねばならないのでございます。第一に、正當に所有する物でなされること。第二に、心から悔悟している時になされること。第三に、不足を来すと感じる程度に、また必要不可欠な物でなされること。第四に、存命中になされること。第五に、唯々神のためになされるのであって、虚栄心や見栄によりなされぬこと、でございます。殿、この五つの条件が充たされました時、全ての善行や施しは申し分のないものとなり、人は多くの報いを受け取るであります。しかしながら、殿はもとより何人も、五つの条件が充たせなくとも善行をお止めになつてはいけません。完全に充たされた後に行なわれるのであれば応報は得られない、と考えるのはこの上もなく愚かでも無分別であります。どの方法で善行がなされても常に善事でございますので。善行は人が罪を免がれたり、悔い改めるのを手伝ってくれますし、健康や富や名誉や名声をもたらす手助けもしてくれます。故に、どの方法であれ善行は全て

常に有意義なのでございます。もっとも、申し上げました五つの条件を充たしてなされれば、魂の救済と利にとりましては最良となりましょう」

伯爵はパトロニーオが述べたことは真理であると判断されたので、そのように行なうことを決心された。そして、パトロニーオの言葉通りに実行出来るよう神に願われた。ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

天上の栄光を確かなものにしたいのなら、
在世に正しい意図で善をなせ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第四十一話「アラークン³²と言うコルドバの王に

起った事について」

ある時ルカノール伯爵が助言者パトロニーオとこのような話をされた。

「パトロニーオ、知つての通り、予は非常にすぐれた狩人だ。その上、人の考え及ばぬ新しい仕掛けの数々を考案し、さらに

鷹狩りの鷹の脚に結えるひもや、目隠し用のとんがり頭布にこれまでになくいろいろな改良を施したりもしてきた。予に悪態を吐きたい連中が、今、それを種に予を愚弄するのだ。数多の戦で博した勝利でシッド・ルイ・ディアスやフェルナン・ゴンサーレス伯爵を称賛したり、数々のすばらしい征服により至福を得られた聖王ドン・フェルナンドを賛美したりする時、脚ひもやとんがり頭布になしたことを取り上げて、りっぱなことをおやりになったと言って予を誉めそやすのだ。この称賛には悪意の込められているのが分かっておるので、予が行なった有用なる事が嘲笑されないためになさねばならぬことを助言してもらいたい」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「この件で殿がなさいますに最も適切な事をお分かりいただけますには、アラークンというコルドバの王であるモーロ人に起きましたことをお聴きいただきますれば幸いです」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「コルドバに、名をアラークンと称されます王がお出になりました。国を申し分なく治めておられました。名君が常に心掛け、務めねばならない、名を高め名声を得ることに力をお入れにならなかつたのでございます。王たる者は、ましてや名君になろうとのお方は国を守るだけではなく、正當に国を大きくし、また在世には臣民の称賛を博し、死後は善行により名を留めるように振舞い、

努めることが義務だからでございます。ところがこの王はこのようなことに無関心で、唯食べることや身を休めること、そして楽しく生活することだけに腐心しておられたのでございます。

ある日、王がお憩みになっておられますと、その御前でアルボゴンというモーロ人がとても好きな楽器が奏でられるということが起きました。ところが、王には本来のすばらしい音色が出ていないようにおもわれましたので、アルボゴンを取ると並んでいる穴の下にもう一つ穴をお開けになりました。それ以来、アルボゴンはこれまでよりもはるかにすばらしい音色が出るようになったのでございます。この改良はアルボゴンにとってすばらしいものではありませんが、王たる者が行なうにふさわしい大事業ではなかつたものですから、臣民はやゆしてそれを称賛し出したのでございます。以後、人を称賛する際、*Wa hadi ziyadat Al-Hakam*、つまり「これはアラークン王の仕業だ」と言われるようになりました。この言葉は国中に広まり、終には王のお耳に届く迄になったものですから、臣民がこれをお口にする理由をお訊ねになられたのでございます。しかし、お付きの者達は、当初は返答を避けていたのでございますが、王が詰問されましたので答えざるをえなくなりました。理由をお知りになると、王は大変気分を書されましたが、思慮深いお方でしたので、口にする者の処罰を望まれず、臣民が心から称賛せざるを得ないような別の改良を行なう決心をなさいました。その頃、コルドバの回教寺院はまだ完成しておりませんでした。

それに王は十分に手を入れられ仕上げられたのでございます。これがイスパニアにいるモーロ人の有す最も壮大にして壮麗な回教寺院でございます。お陰さまで現在は教会となり、サンタ・マリア・デ・コルドバと呼ばれております。聖王ドン・フェルナンドがモーロ人からこの都市を奪取されました時、聖母マリアに捧げられたからでございます。

アラークン王は回教寺院に手をお入れになり見事完成にこぎつけられました時、このようにお述べになりました。『これまではアルボゴンに手を入れたことで嘲笑されたが、これからはコルドバの回教寺院に手を入れたことで賛美されるはずだ』と。事実、王は大変な称賛を浴びられたのでございます。これまで王を愚弄するのに用いられておりました言葉は文字通り賛辞となり、今日でもりっぱな行為を称えます時、モーロ人は「これはアラークンの仕業だ」と言うのでございます。

伯爵様、鷹の脚ひもや目隠し用のとんがり頭布や狩りの仕掛けに手をお入れになられたことで、からかいの誉め言葉を受けるのは大変心外であるとお考えでございますならば、ご身分あるお方の務であります偉業の達成にお励みなさって下さい。鷹狩りに関することではなされたいろいろなことを今愚弄するため賛辞を呈しております連中も、その時こそ心から殿の偉業を賛美せざるを得ないでありましょうから」

伯爵はこの助言が非常に有意義であると判断されたので、その通りに実行された。すると結果は上々であった。ドン・ファ

ンはこの教訓談が有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

僅かな有用を行なうとしても、
出来れば永遠に残る偉業も行なえ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第四十二話「善人を装ったある女に起った事に

ついて」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトロニオとこのように話をされた。

「パトロニオ、予はこれまで数多の方と論じかつ問答を重ねてきた話題がある。それは悪人が人々に大禍をもたらすために採りうる手だては何かであった。叛徒になる手もあると言ふ者もあれば、争い好きになる手もあるとか、極悪人になることであると云う者もいる。また、人々に最大の禍をもたらすことのできる手は酷い中傷家になることだ、と言ふ者もある。そこでお前の叡智を頼み、この中の何れが人々に大変な禍をもたらさうる手なのか言ってもらいたいのだ」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「お判りいただきますには、善人を装っておりましたひとりの女と悪魔とに起きました事をお聴きいただきますれば幸いです」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「ある邑にとても人の好い若者がございました。すでに妻帯しておりましたが、妻との仲は良好そのものでございましたので、とても幸福に暮らしておりました。好事は悪魔にとって常に不快の因でありますので、この夫婦仲をとて苦々しくおもっておりました。そこで、長らく、二人の間を裂こうと努めたのですがうまくゆかなかったのでございます。

ある日悪魔は、打つ手に窮し落胆して、若夫婦が暮らす邑を離れました。その道すがら善人を装ったひとりの女と出会しました。互いに挨拶を交すと、女は元氣のない理由を悪魔に尋ねました。そこで、若夫婦のいる邑から来たことや、長い間夫婦仲を裂くために努めてきたのだが徒勞に帰したこと、それがお頭の知るところとなり、時間ばかり費やして何も出来なかった自分への信頼を失ったと告げられたので、落胆していることなどを女に語ったのでございます。すると『あなたの知恵をもつてしてもうまくゆかなかったなんて驚きだわ。だけど私の言う通りにやるのならあなたの悩みを解決してあげる』と女は答えました。悪魔は『若夫婦を仲違いさせられるのであれば、お前の言いつけ通りにやろう』と応じたのでございます。悪魔と善

人を装った女が手を打つと、女は若夫婦の住む邑へ向いました。そこで、日々手を尽しましたので若妻と知り合いになりました。そして、あなたの母上に育てられた、とか、母上のご恩に報いるためにはどうしてもあなたにお任せねばならず、力の限りお仕えする、と言っては信用させたのでございます。人の好い若妻は、女の話信じると、家に住み込ませ、やがて家事一切を任せました。彼女の夫も女を信頼したのでございます。

女が住み込んでからずいぶんと日が経ち、すっかり若夫婦のお気に入りになった頃でした。ある日、女は若妻のところへともつらそうな面持ちで行くと、信頼を寄せてくれている彼女にこういったのです。

『奥様、世間の噂がとても残念でございます。ご主人には他に好きな女性がおられると聞いたものですから。奥様、お願いします。奥様以外の女性を好きになられないようご主人をもっと大切に、もっとやさしくしてあげてください。ご主人の愛情が他の女性に傾くことは、奥様にとってこれほどの不幸はございませんので』

女からこのように聞かされても、人の好い若妻には信じられないことでしたが、とても悲しくなりました。悲嘆にくれる若妻の様子を目にした後、女は彼女の夫が戻ってくる道を知っておりましたので、そちらへ出向きました。夫と出会うと『奥様のようなすばらしいお方がおありですのに、他の女性を愛しておられますのは悲しいことですね。奥様はこのことをすでに

ご存知なので、ご心痛は大変なものです。〃一生懸命尽しているのにこのような仕打ちでは、あの人よりも私を愛して下さるお方を探すつもりなの〃と打ち明けられました』と伝え、さらに『この話はここだけのことでお願いします。奥様に分かれれば私は生きてはおれませんので』と頼んだのでございます。

女からこのように聞かされた夫はその話を信じはしませんでしたが、とてもつらくそして悲しくなりました。女はこう告げると、先に若妻のところへ戻り、とても気の毒そうにこのように言ったのでございます。

『奥様、これほどまでの不幸がございましょうか。ご主人は奥様に変な怒りなのです。申し上げておりますことが本当でございますのがすぐにおわかりになりますわ。ご主人が初めてお腹立ちになってお戻りになりますから』

若妻にこのような心配ごとを言い残すと、女は夫を迎えに出て行きました。そして同じことを告げました。夫がやって来て妻の悲しげな様子を見、その上二人が常に共有してきた喜びの気持が互いに少しもわいてこないのが分かりますと、夫も妻も不安で仕方がありませんでした。夫が外出すると、女は若妻に『お望みなら、ご主人が奥様に抱いておられる憎しみを取り除ける術すべを心得ております物識りを探して参りますが』と申したところ、若妻はこれまでのように夫と仲良く暮らしたいものですから『そうしてもらえればとてもありがたいわ』と頼んだのでございます。

二・三日がたってから、女は若妻のところへ戻るとこのように述べたのでございます。『大変な物識りを見つけて参りました。この男が言うには、〃ご主人の喉に生えているひげを数本持参してもらえば、それでご主人の憎しみを取り除き、お二人が再び以前のように、或はそれ以上に幸福に暮らせるよう占ってみるので、ご主人がお出の際は奥様のひざ枕でお休みになるようにして下さい〃、とのことでございます』と。そして、ひげを切り取るためにかみそりを渡しました。若妻は心から夫を愛しておりましたので、夫との気まずい関係に心を痛めておりました。これまでのような幸福な生活をもう一度取り戻すことを切望しておりましたから、その通りにすると応えると、女が持参していたかみそりを受け取ったのでございます。

女は再び夫のところへ行くと『ご主人のお命が危ないことを考えますとお気の毒で黙ってはおれません。実は、奥様は愛人のもとへ行きたくて、ご主人の殺害を企んでおられるのを知っているからです。真実を申し上げていることをおわかりいただくために申しますが、奥様と愛人はご主人殺害の方法をこのように打ち合わせておられます。それは、ご主人がお出になると、奥様はご自分のひざを枕として供され、ご主人がお眠りになりましたら隠し持っていたかみそりで喉笛を掻き切る、といった手筈でございます』と打ち明けました。この打ち明け話に夫は驚愕しました。先に女から聞かされていた作り話にやきもきしていたところですから、今の話で不安が一層募りました。しか

し、慎重に身を構えて事の真否を確かめることにしました。夫は家に向かったのでございます。

夫に会うと妻はこれまでよりもずっとやさしく迎えました。

そして『体を労(いた)わることにもならず仕事に精をお出しですが、私の傍で横になって頭を私のひざの上におのせなさい。心地よく眠らせてあげますわ』⁽¹⁷⁾と言ったのです。夫は妻の言葉を聞くと、女の言ったことが本当であることがわかり、妻の行動を確かめるために頭を妻のひざの上のせて横になり、眠ったふりをしました。妻は夫が眠り込んだものとおもい、女の言葉に従ってかみそりを取り出すと、あごひげを数本切り取るうとしました。妻の手に握られたかみそりが喉元に近づくのを感じた夫は、女の言ったことが真実であることを悟り、両手がかみそりを奪い取ると、妻の首を掻き切りました。悲鳴を聞いた妻の両親と兄弟が馳せつけました。これまで、夫や他の誰からも後指を指されるようなことを一度たりともしたことのなかった彼女が、首を切られて息絶えているのを目にした時、彼らは悲憤慷慨すると、夫を襲い殺してしまいました。騒ぎを聞きつけた夫の身内の者は、彼を殺した者を皆殺しにしたのです。このように復讐が繰り返されましたので、その日の間に、邑のほとんどの者が互いに殺し合ったのでございます。

この騒動は全てあの偽善者の虚言によって引き起こされました。しかし、神は悪人が罰(な)せられず、悪事が暴かれないことをお望みではありませんので、この不幸が全てあの善人を装っ

た女によって引き起こされたことを暴かれました。故に、女は裁きを受け、苛酷な死刑に処されたのでございます。

ルカノール伯爵様、この世で最も有害なる者をお知りになりたければ、それは良きキリスト教徒或は誠実な人間であると見せかけて、故意に人々を仲違いさせるために虚偽虚言を触れ歩く者であることをご承知置き下さい。殿にご忠告申し上げておきますが、偽善者を演ずる大方の連中の心中は、常に策謀や虚偽で充ちておりますので、そのような者から絶えず御身をお守り下さい。連中を見分けられますには、福音書の中に記されてあります次の文言を想起なさって下さい。“A fructibus eorum cognoscetis eos”つまり、“彼らの行ないによって知るべきなり”。⁽¹⁸⁾ 真実、この世には胸中の秘めごとを隠しおおせる者など誰もなく、一刻は隠(い)せてもいつまでも隠蔽しおおせるものではない、とお心得下さい」

伯爵はパトロニーオの所見は真理であると判断されたのでその実行を決心された。そして、己が身と全ての朋輩をそのような者からお守り下さいと神に乞われた。ドン・ファンはこの教訓談は有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

偽善者の禍から身を守りたくば、

外見ではなく、行ないによって判断せよ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第四十三話 「善と悪及び常人と狂人に起った事

について」

ルカノール伯爵は助言者パトロニーオとこのように話をされた。

「パトロニーオ、予は今のところ二人の隣人を有しておる。一人方は、われわれの良き関係から、心から敬慕しておる。また、崇敬せねばならぬお方だ。ところが合点がゆかぬことに、しばしば非常に腹立たしくてならぬ迷惑を予になさる。もう一人方は、親交のないお方なので敬愛する必要はないのだが、この方もしばしば不愉快なことを予になさる。そこでお前の叡智を頼み、この二人方への身の処し方を助言してもらいたい」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「お話の事柄は一つというよりも二つで、その上、内容が各々まったく異なっております。そこで、この件で殿が適切なお振る舞いをお聞きいただきますれば幸いです」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「二件の話を同時

に申し上げることは叶いませぬので、初めに善と悪の話を、続いて常人と狂人の話を申し上げることに致します。

伯爵様、善と悪は一緒に暮らす取決めを交したのでございます。落着きがなく、絶えず騒ぎを弄び、狡猾で邪まな手をあれこれ考える時以外は休みもしない悪が、『自活出来るように家畜を飼育するのが良いだろう』と善に言ったのでございます。この申し出に善も賛成しました。そこで、両者は雌羊を飼育すること合意しました。雌羊が出産しますと、悪は『親と子のどちらかを選ぶように』と善に提案しました。善良で慎重な善は選びたくなかったものですから、『君に選択を任せる』と言ったのでございます。悪は狡猾で無遠慮ですから、その申し出にほくそ笑むと、生まれたばかりの子羊は善が、雌羊の乳と毛は自分が取ることを提案しました。善は『それで結構だ』と告げたのでございます。

しばらくして、再び悪が豚の飼育を申し出ましたところ、善はこれを受け入れました。子豚が生まれますと、悪は善に『この前は君が子羊を、自分は乳と毛の方を取ったので、今回は君が雌豚の乳と毛を、自分は子豚を取ることにする』と提案しました。善はその提案を承諾したのでございます。

その後しばらくして、悪が野菜の栽培を提案しましたので両者はカブラの種を播きました。カブラが実りますと、悪は善に『見えないものの価値は判らないので、君が取り分にするものは地上に出ていて見える葉の方を、私は地中に在るものをもら

うので』と言ったものですから、善はその申し出を受け入れませんでした。次に、両者はキャベツの種を播きました。実りますと、悪は『カブラの時は君が地上に出ている葉を取ったので、キャベツの今回は地中に在るものを取るよう』と告げましたところ、善はその申し入れを承諾したのでございます。

その後しばらくして、悪は善に『家事をやってくれる女性を家に入れば好都合なのは』と提案しましたところ、善も賛成したのでございます。女性がやって来ますと、悪は『彼女の腰から上の部分は君が、下の部分は私が取ることにしよう』と善に申し入れましたので、善はそれを承諾しました。

かくして、善の取り分は家事全般を行ないましたし、悪の取り分は悪の妻となり、夫と同衾することになったのでございます。

女性は子どもを宿すと、やがて男子を出産しました。母親が赤子に乳を飲ませようとし、それを目にした善は拒否し、『乳は自分の取り分の一部であるから絶対認めない』と言ったのでございます。生まれた子どもを見に悪がいそいそとやって来ましたところ、母親の泣いているのが目に入り、その理由を尋ねました。彼女は『赤ん坊に乳を与えられないからです』と答えました。悪が『乳を与えるよう』と告げますと、母親は『善が乳は自分の取り分だと言って許してくれないのです』と訴えました。これを聞いて悪は善のところへ行くことにならず、善は悪の妻となり、夫と同衾することになったのでございます。

と頼みました。善は『乳は自分の物だから飲ませられない』と応えました。素気ない返答に悪は嘆願し始めました。悪の困惑した様子を目にし、善はこう言ったのでございます。

『君、君がいつも取り分にした物と私にくれた物との差違ちがひに私が気付いていなかったとおもっているのかい。私はこれまで君の取り分ほんの少したりとも欲しいと言ったことはない。君が分け与えてくれた物でじつとがまんしてきたんだ。神が、今、君を私の物を必要とする立場に置かれたからといって、君はこれまで私に同情や思い遣りを寄せてくれたことなど一度もないのだから、私の拒否に会って驚くことはない。君がこれまで私に取ってきた態度を考えることだね。今度は君ががまんすることだ』

善の言ったことはそのとおりであり、このままでは赤子の命が危ないことを考えると、悪はとても心配になり、善に『親の過を忘れて、後生だから子どもにはお慈悲を。これからは常に君の求めには何でも応じるから』と懇願し出しました。その有様を見て善は、赤子の生死は自分のやさしさにかかっていることを悪に悟らせるよう、神が手をお貸しになられたのだと判断し、これは悪を懲らしめるのに絶好の機会だと考えましたから、悪に『母親が授乳するのを許してもらいたいのなら、君が赤子を抱いて外へ出、辻毎で街中の人の耳に届くように、皆さん、いいですか。悪は善のやさしさに負けました』と触れ歩くことだ。そうすれば授乳を認めよう』と言ったのでございます。

の申し出を悪は快諾しました。子どもの命がずいぶん安く買えたとおもったからでした。善の方は、これで十分悪を懲らしめることになるだろう、と考えました。悪は言われた通りに行ないましたので、人々は善が常にやさしさで悪を負かすことを知ったのでございます。

ところで、常人と狂人にはこのような事が生じたのでございます。ある善良な人は湯屋の持ち主でございました。人が入浴していると、狂人が湯屋へやって来ては桶や石や棒など手当たりしだいのもので浴客をなぐりつけましたので、誰れも入浴に来なくなつたのでございます。ですから収入が途絶えてしまいました。狂人に収入源を断たれたことが判つた湯屋の主は、ある日早起きすると、狂人がやって来る前に洗場に入りました。裸になると、熱湯の入っている桶とそれに棍棒を手に取りました。狂人がいつものように入浴している浴客をなぐろうと湯屋に来、洗場へ入りましたところ、裸で待ちうけていた主は、狂人が入つて来るのを見るや、腹を立てて彼の方に走り寄り、桶の中の熱湯を頭上から浴びせると、狂人が死ぬのではとおもつたほど体中を棍棒で滅多打ちにしたのでございます。ですから狂人は、この男は気が狂れているんだと考え、悲鳴をあげて逃げ出しました。すると、ひとりの男とぶつかりましたので、男は悲鳴をあげて逃げ出して来た理由を尋ねました。狂人は男に次のように言つたのでございます。

『君、気をつけなさいよ。狂人がもうひとり湯屋にいるから』

ルカノール伯爵様、お二人の隣人とは次のようにお交際つきあ下さい。生涯友好関係の保持を願っておられますお方には、常にお方の役に立つことをなさって下さい。たとえ時折殿のお怒りに触れるようなことをされましても、一夜の宿を提供されたり、お困りの際には援助の手を差し伸べたりなさることでございます。しかし、それは常に友愛の情により行なうものであつて、恩義によるものではないことを悟らされることでございます。ところで、友好関係のないお方には少しも忍従する必要はございません。それ故、被る危害には手段を尽して報復する覚悟にあることを知らしむることでございます。つまり、不仲の間柄の友は、好意などではなく、何よりも恐怖心から交友関係を保とうとするものでございますので」

伯爵はこれを非常に有意義な助言であると判断されたので、その通りに実行された。すると結果は上々であつた。ドン・ファンはこれらの教訓談は有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作つた。

善は常にやさしさで悪を負かす。

悪い奴は徹底的に懲らしめよ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第四十四話「忠臣ドン・ペドロ・ヌーニェス、

ドン・ルイ・ゴンサーレス・サバ
ーリヨス^⑩、ドン・グティエーレ・
ルイス・デ・ブランキーリヨ^⑪と廉
潔の士ドン・ロドリゴ伯爵^⑫とに
起った事について」

またある時、ルカノール伯爵が助言者パトロニオと話をし
ておられた際、このように語られた。

「パトロニオ、予はもはやこれまでという状態に陥ったほ
どの大変な戦を幾度も経験しておる。ある時、絶対絶命の状態
に立ち至った際、手塩にかけて育てた数名の家臣が、恩義に報
わねばならぬというのに、予を見棄て敵に寝返った。その上奴
らは予になした不為な行為で功名を立てたのだ。奴らの行為は、
正直に申すと、以前よりもさらに酷い世評を予にもたらした。
そこで予は、神がお前に与え給うた叡智により、この件でお前
の考える予のなすべきことを助言してもらいたい」

「伯爵様」とパトロニオは返答した。「殿にかくも非道な
仕打ちをされた家臣の方が、忠臣ドン・ペドロ・ヌーニェス・
デ・フエンテ・アルメヒール、ドン・ルイ・ゴメス・デ・サバー
リヨス及びドン・グティエーレ・ルイス・デ・ブランキーリヨ

の如き騎士でありますなら、或はこれら三騎士に生じたこ
とを承知しておりましたのなら、そのような行動はとらなかつ
たでありましょう」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロニオは語り出した。「廉潔の士ドン・
ロドリゴ伯爵はドン・ヒル・ガルシア・デ・サグラの姫君
を娶られたのでございます。このご婦人は大変貞淑なお方であ
りましたのに、ご夫君の伯が奥方を中傷されたのでございます。
奥方はご夫君の中傷を心から嘆かれ、もし非がわたくしにあれ
ばそれが判明するように明示されんことを、また夫が故意にし
たのであれば夫に非を明示されるよう、神に祈禱されたのでご
ざいます。祈禱が終ると直ちに神はご夫君の伯爵を癩病病にさ
れましたので、奥方は伯と離縁されたのでございます。その後
間もなくして、ナバーラ王が使者を彼女の許に遣わされ、奥方
として迎え入れられましたから、ナバーラの女王になられたの
でございます。

伯爵は、癩病が不治の病であることを承知しておられました
ので、聖地で死ぬべく巡礼の旅に発たれました。伯爵は非常に
高貴な方でありましたし、大勢のりっぱな家臣をお持ちではあ
りましたが、先に申し上げました三人の騎士だけが随行したの
でございます。主従は聖地に長期間留っておりましたから、携
えてきた金子も底をつき、窮しましたので、主君に供する食物
にも事欠く有様でした。あまりの困窮に、二人の騎士が毎日広

場で雑役夫として働き、一人が主君の世話のために残ることにしました。かくして、二人の騎士が稼いでくるもので主従は糊口を凌いだのでございます。三騎士は毎晩伯爵の身体を洗っては癩病による潰瘍をきれいにしておりました。

ある晩主君の手足を洗っておりますと、突然、止むを得ず唾液を吐いてしまったのでございます。伯爵がこれを目にされ、潰瘍に吐き気を催したのだとお考えになって心から悲しまれ、お泣きになりました。そこで、三騎士は主君の病に嘔吐を催したのではないことを判っていたために、伯爵の全身の潰瘍から拭い取った濃やかさぶたで充ちた水を両手で掬うと、がぶがぶと飲んだのでございます。このように、主君である伯爵と寝食を共にしながらお亡くなりになるまで付き従ったのでございます。

生死の如何んを問わず、主君をお連れせずにカステイリヤへ戻ることは不面目であると考えましたので、彼らは主君の亡骸を遺棄しようとはしませんでした。遺体を煮て骨だけを持ち帰ることを勧める者がいたのですが、まるで生命があるかのような亡骸でしたから『何人にも指一本たりと触れさせることを認めるつもりはない』と応えました。そこで、彼らは遺体を埋葬し、肉体がすっかり腐り切るまで待つと、遺骨を小さな櫃に入れ、交互に肩に担いで運んだのでございます。

このように、彼らは道中主君の遺骨を背負い、施しを乞いつつ旅をしたのでございます。彼らはその間に遭遇した全ゆる艱

苦の様子を呈していました。彼らは極貧の状態にありながらも無事トローサの地まで戻って参りました。そして、とある邑へ足を踏み入れましたところ、一人の貴婦人を義弟との密通の科で火炙りにしようとする群衆と出会しました。彼女を救い出す騎士がいなければ焼殺されてしまうとのことでした。これまでのところ、救いの手を差し伸べるために名乗り出る騎士はいなかったのでございます。

忠臣にして高潔の人士ドン・ペドロ・ヌーニェスは、擁護者がいなければ婦人が焚殺されるのを知ると、朋輩に『あのご婦人が無実であることが判ればお助けするつもりである』と言って、彼女の前に進み出、事の真否を尋ねました。彼女は『咎められるような過を犯してはおりませんが、そのような思いを抱いたことはございません』と答えました。ドン・ペドロ・ヌーニェスは、彼女は不義の願いを抱いたのだから、彼女を擁護する者に危害の及ばぬことなどあり得ないと考えましたが、すでに名乗り出ておりましたし、彼女が罰せられるような過を犯していないことが判りましたので、『お救い致す』と告げたのでございます。彼女の告発者達は、彼が騎士ではない、と言って拒みましたが、持参していた証を見せられると認めざるを得ませんでした。

そこで、貴婦人の身内の方々は彼に馬と武器を与えました。闘技場へ入る前に彼は『神の助力により試合に勝ち、ご婦人をお救い致す。されど、不義を願われたことから、某に危害の

及ぶことは避けられまい』と彼らに告げたのでございます。闘技場へ入ると、直ちに神はドン・ペドロ・ヌーニェスに加担されましたので、相手を降しご婦人の命を救ったのですが、片目を失ってしまいました。このように、ドン・ペドロ・ヌーニェスが闘技場へ入る前に予告した通りになったのでございました。婦人とその身内の方々は、三騎士が今後はもっと楽に主君である伯爵の遺骨を携えて旅の出来るように多額の金子をドン・ペドロ・ヌーニェスに与えました。

カステイリヤ王の耳に、三騎士が主君の遺骨を抱いて平穩無事に帰途の旅にあるという知らせが届きました時、王は王国内にかくも忠義に篤い家臣のいることを心からお喜びになられ、神に感謝されました。それ故、彼らがそのままの身形で徒歩で来ることを伝えるよう、使者にお命じになりました。彼らがカステイリヤ王国へ足を踏み入れます当日、王はわざわざ国境から五レグワ進んだ所まで歩いてお出迎えになられました。そして、三騎士には今日でもその子孫が継承しております領地の加増を下賜されたのでございます。王とお付きの者達は、伯爵及びとりわけ三騎士に敬意を表すべく、伯爵の遺骨が葬られるオスマまで同道されました。埋葬後三騎士は各々の館に戻ったのでございます。

ドン・ルイ・ゴンサーレスが帰館しました日、妻を伴って食卓につきますと、おいしそうな肉が目に入りましたので、彼女は天上を仰ぎ見て次のように言ったのでございます。

『主よ、祝福されてあれ。あなたは私にこの日を迎えさせて下さいました。あなたもご存知の通り、ドン・ルイ・ゴンサーレスがこの地を出立致しましてから、私は肉とブドウ酒を断つて参ったからでございます』

ドン・ルイ・ゴンサーレスは妻の行為に心が痛み、その理由を尋ねました。彼女は『ご承知のように、伯爵と旅立たれます時、あなたは私にこうおっしゃったのです。『わしは伯爵と一緒にでなければ絶対戻らないだろう』と。さらに『パンと水が決して尽きぬよう慎ましく暮らすように』と。あなたがこのようにおっしゃったものですから、私にはご意向に背く理由などございませんので、パンと水だけを飲食して参ったのです』

同様に、ドン・ペドロ・ヌーニェスが帰館し、妻と身内の者だけになりました時、一同は彼と共に居ることが嬉しくてならず、笑を浮べました。ところが、ドン・ペドロ・ヌーニェスは片目を失った自分を噛っているのだとおもい、頭からマントを被ると悲しげにベットに身を投げました。夫の悲しげな様子を見て妻はとて胸が痛み、執拗にその理由を訊ねましたところ、夫は『失った目を噛われるのが無念故にだ』と応えました。このような夫の言葉を耳にした妻は、針を片方の眼に突き差して潰すと、ドン・ペドロ・ヌーニェスに『人が笑ってもあなたご自身が噛われているとお考えにならないようにこうしたのです』と言ったのでございます。こうして神は忠義溢れる行為により三騎士に報われたのでございます。

私は、殿に不為な振る舞いをされた家臣の方が三騎士のようでありましたなら、或は彼らの忠義溢るる行為が恩賞をもたらしたことを承知しておりましたなら、他の手だてで身を処されたであろうと考えます。しかしながら伯爵様、殿に不為をなす方がおられるからと申せ、親切になさることをお止めになつてはいけません。このような方は所詮自らを書くことになるのでございます。少数の方が殿に悪しき振る舞いをされましても、大多数の方は好意を示されておりますことや、前者からの不為な行為よりも後者からお受けになられた尽力の方が多いことをご勘案なさって下さい。殿は助力を惜しまれなかつた方々からの応報を心待ちになさるのではなく、大勢の方になされた殿のご尽力がrippleに活用されていることがお判りになるよう、どなたかが殿の為に尽力なさいますのをご期待なさって下さい」

伯爵はこれを非常にそして真まことに有意義な助言であると判断された。ドン・ファンはこの教訓談は非常に有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

悪しき振る舞いを受けたからとて、
親切な振る舞いを決して止めるな。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第四十五話 「悪魔の友及びその手先となつた男 に起つた事について」

ある時ルカノール伯爵は助言者パトロニオとこのように話をされた。

「パトロニオ、ある方が言うには、占いはもとより、修めれば予も未来の出来事を予測し得たり、財産を殖やすに大いに役立つ術等を行ない得る様々な方法を知っているとのことだ。しかし予は罪を犯すような気がしてならぬ。そこで信頼を託すお前に、この件での予の身の振り方を助言してもらいたい」

「伯爵様」とパトロニオは返答した。「適切に身を振る舞われますには、ある男と悪魔とに生じました事をお聴きいただきますすれば幸いです」

伯爵はそれがどのような話ことであるのかお訊ねになられた。「伯爵様」とパトロニオは語り出した。「大変裕福でありました男が食べるに事欠くほどの貧困に陥つたのでございます。久しく運に恵まれた者が見放されるほどの不幸はこの世にございませんので、好運から一転して不運に見舞われたこの男はとも哀れな状態でした。ある日、たった独りで、悲嘆にくれ、自暴自棄になつて山道を歩んでおりますと悪魔に出会したのでございます。悪魔は全ゆる出来事を承知しておりますので、この男が打ちひしがれている理由も承知しておりました。それに

もかかわらずその理由を尋ねたのでございます。男は悪魔に『言ったところで無駄なことだ。この悲しみをお前に癒せるわけなどないのだから』と応じました。すると悪魔は『お前が私の言う通りにするのならその手だてを教えてやろう。私にはその能力があることを納得するよう、お前の考えていたことや悲しんでいる訳を言ってやろう』と告げたのでございます。そこで、悪魔は十分承知している者として男の経歴と悲嘆の理由を述べたのでございます。さらに『私の言う通りのことをするなら、貧困から救い出し、一族の誰もなり得なかつた金持ちにしてやろう。私は悪魔だからそれが出来るのだ』と言ったのでございます。男は悪魔に名乗られて大変恐ろしかったのですが、悲哀と極貧の状態にありましたから、『もう一度金持ちにくれるのならお前の望むことは何んでもやる』と応えました。殿、悪魔は常に人間を墮落させるためのまたとない好機を窺っていることをご銘記なさって下さい。つまり、人間が極めて困窮や困難な状態にありましたり、激しく焦慮したり、欲に目が眩んでおります時、悪魔は人間から望むもの全てを手に入れるのでございます。ですからこの男が悲嘆にくれているのを見て、墮落させる手掛りをつかんだのでございます。

さて、両者の思惑が一致しましたので男は悪魔の手先になりました。その後で悪魔は男に『これからは盗人になるんだ。戸締りがいかに盤石であろうと、お前に開けられぬ家や扉は決してないだろう。また思いがけず危い目に会ったり、牢獄へ放り

こまれても、"ドン・マルティン、助けてくれ！"と言って私を呼ぶだけでいいのだ。直ちに飛んで行って救い出してやるから』と言ったのでございます。両者は了承し合うと別れました。男は、深夜、とある商人の家へ出向きました。悪事を働こうとする者は常に明るさを嫌うからでございます。戸口に来ますと、悪魔が彼のために扉を開けてくれたのです。金庫の扉も同じでしたから、多量の金子を手にすることが出来ました。次の日、大きな盗みを働きました。そして次の日も。こうして盗みを重ねましたので、これまでの貧乏が想い起せないほどの大金持ちになりました。ところが、哀しいかな男は貧しさから抜け出せたことに満足せず、盗みを働き続けました。そして挙句の果てに捕えられたのです。捕縛されるや直ちにドン・マルティンを呼びますと、大急ぎでやって来、即座に解放してくれたのでございます。ドン・マルティンが約束を果すのが判ると、男は再び盗みを始めました。無数の盗みを働いたものですから、すっかり大金持ちになってしまったほどでございます。しかし、再度捕えられましたのでドン・マルティンを呼びました。ところが望んだほど急いでやって来てはくれませんでしたから、捕縛した村の判事達は取り調べを始めました。その最中にドン・マルティンはやって来ました。そこで男は訊ねたのでございます。

『ドン・マルティン、どんなに恐ろしかったことか！ どうして早く来てくれなかったのだ！』

ドン・マルティンは『とても差し迫った事件にすっかり手を取られてしまったものだから遅くなってしまったんだ』と告げると、直ちに男を牢獄から出してやったのでございます。

男は再び盗みを始めました。無数の盗みを重ねている間にまた捕えられました。そして判事に取り調べられ、判決を下されたのでございます。ドン・マルティンは、今度は判決後にやって来ると、男を救い出したのでございます。ドン・マルティンが常に救い出してくれるのに味を占めた男は盗みをし続けました。その結果また捕えられました。男はドン・マルティンと呼ばれましたが、なかなか来てくれず、処刑の判決が下されてからやっと現れました。今回は、ドン・マルティンが国王に直訴してくれたお蔭で、やっと釈放されたのでございます。

その後も男は盗みを続け、そして捕えられると、ドン・マルティン呼びました。しかし、彼は絞首刑の判決が下される迄来てくれなかったのでございます。つまり、ドン・マルティンが現れました時、すでに男は絞首台の傍に居ました。男は彼にこう言ったのでございます。

『ああ、ドン・マルティン、これは戯事ざれごとではなかったんだぞ。本当に肝を冷やしたぜ』

ドン・マルティンは『巾着に五百マラベディーを入れてきた。判事に渡せば釈放されるだろう』と男に言ったのでございます。判事は絞首刑の判決をすでに宣告しておりましたので、絞首用の縄が求められていました。その間に男は判事を呼び止めると、

巾着をそっと差し出しました。多額の金子をもらったものと同じ、判事は居合わせた人々に向かってこう言ったのでございます。

『皆の者、これまで絞首用の縄が見当らぬことなど一度もなかった。であるからこの男は無実であると考えろ。つまり、縄が見当らぬのは神がこの男の死を望んでおられぬ故だと考えるからだ。そこで、処刑を明日迄延ばすことにし、さらに時間をかけて男を取り調べることにする。もし有罪とあらば明日に刑を執行する余裕があるからだ』

判事がこう言ったのも男を自由にするためで、それも五百マラベディーをすでに懐にしていると思っているからでございます。ところが、人目につかぬよう巾着を開けてみますと、五百マラベディーが入っていると思いきや、代りに一本の縄が入っていたのでございます。これを見て判事は即座に男を絞首刑にするよう命じました。男が絞首台に立たされました時にドン・マルティンがやって来ました。助けてくれるように頼みましたところ、ドン・マルティンは『私は全ての友を絞首台に引立てられるまでは常に救っている』と応えました。かくして、男は悪魔を信頼したことにより身も心も亡ぼしてしまったのでございます。

何人も決して不幸な最期を遂げたくはございませんから、決して悪魔を信頼しなかったことを銘記なさって下さい。また、占卜或は占師や呪師を信じる者にご留意なさって下さい。さす

れば、これらの者は常に悲惨な最期を遂げているのがお判りいただけましょう。私の申し上げておりますことが信じられぬこととでございますれば、アルバール・ヌーニェスとガルシラーソンのことをご想起なさって下さい。両人が占トや呪術を世の誰よりも信じるあまりに、如何なる最期を遂げたかをでございます。

ルカノール伯爵様、肉体と魂にとりまして申し分のない人生をお送りになりたくば、神を心から信頼され希望を託されることとでございます。そして精一杯努力なさって下さい。さすれば神は殿に手を貸されるでありますから。しかしながら、占トや他のくだらぬことを信頼なさってはいけません。それは罪の中でも神を一番悲しませるものであり、神に対する最大の侮辱にして亡恩の行為であることを銘記なさって下さい」

伯爵はこの助言がとても有意義であると判断されたのでその通りに実行された。すると結果は上々であった。ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

神を信頼せぬ者は、

悲惨な最期を遂げるだろう、または、悲運をなめるだろう。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

註

②⑥ ドン・マヌエル親王 Infante don Manuel (?-1283) — 聖王と称されるカステイリャ・レオンの国王フェルナンド三世の末子。長兄は賢王と称されるアルフォンソ十世。本書の著者の実父。

②⑦ 鷹 — 原文ではタカ科の隼 (Falcón sacre)。よく鷹狩りに用いられる鳥。

②⑧ フェルナン・ゴンザレス伯爵 Conde Fernán González (930?-970) — カステイリャ王家にあって、物語や史書を通じて、最も名が高い。独立不羈の精神に富み、有能で機敏な政治家としてきわ立った人物。

②⑨ アシーナスの戦い — アシーナス (Haciñas) はブルゴス県に在る市の名。その戦は次の二つの書の中で述べられている。Poema de Fernán González, 484-565; Primera crónica general, p.400

③⑩ アルマンソール Al-Manzor — アラビア語で無敵或は常勝を意味する。軍事に秀でた人物に付けられた。具体的な人物名は不明。

③⑪ カルカソーナ (西 Carcasona; 仏 Carcasonne) — 南仏オード県の県庁所在地。ピレネー山脈と地中海の近くに在る。

③⑫ アラーケン Al-Hakán II — 九六一年から九七六年までコルドバの王として君臨す。アブデラマン一世 (Abderramán I) により着手された回教寺院を完成せず。

③⑬ シッド・ルイ・ディアス Cid Ruy Diaz de Vivar (104

32〜1099)ーブルゴス県のビバルの出身。スペインの中期で最も有名な武将の一人。シッドとはアラビヤ人が付けた「勇者」という意の綽名。

③④と②⑧と同じ。

③⑤ 聖王ドン・フェルナンド El santo rey don Fernando (1199〜1252)ーカステイリヤとれおん王国の王。中世の最も傑出した人物の一人。国土回復という大偉業を、その生涯にわたって、大きく前進させた。文武両道の人士。

③⑥ アルボゴンーフルートの一種。

③⑦ 本文では *et ella quel espulgaría* のみ (或はしらみ) をとってあげますわ、となっているが、このように訳しておいた。

③⑧ 新約聖書マタイ伝第七章十六「その果によりて彼らを知るべし」或は「あなたはそれによって彼らを知るであろう」等と記される箇所。

③⑨ ペドロ・ヌーニェス Pedro Núñez de Fuente Almejirーソーリアからアティエンサ迄幼少のアルフォンソ八世を連れて逃がれたことにより、主君の命を救ったことで忠臣と称される。

④⑩ ドン・ルイ・ゴンサーレス・サバーリョス don Ruy González de Caballosーサバーリョスの君主。主君であるドン・ロドリーゴの従弟。

④⑪ ドン・グティエーレ・ルイス・デ・ブランキリーヨ don Gutierre Ruiz de Blanquilloー主君ドン・ロドリーゴ及び朋輩のドン・ルイ・ゴンサーレス・サバーリョスとは

親類同志。

④⑫ ドン・ロドリーゴ伯爵 Conde don Rodrigo González de Laraーアルフォンソ七世時代アスタウリアス・デ・サントイヤーナ (Asturias de Santillana) の伯爵であった。一一四一年頃、エルサレムに居たとのこと。

④⑬ アルバル・ヌーニェス Alvar Núñezーアルフォンソ十世から大権を与えられるが後、ドン・ファン・マヌエルと手を結び王に叛旗をひるがえす。

④⑭ ガルシラーン Garcilasoーアルフォンソ十一世の年代記 (Crónica de Alfonso XI, Valladid, 1551) の六十五章では「この人物は占に凝っていた云々」と記されているとのことだが、具体的に誰かは不明。